

ついのべ抄

#001

一晚泣き明かして、踏み出した2階のベランダ。

耳鳴りに似た静謐は、積もった雪のせいだった。

街全体が音を失った早朝。

「それでも好きなんだ」

と叫ぶ代わりに、ベランダから飛んだ。

彼女がほうつと息を吐いてみせた。

ふわふわの手袋でも心許ないのか、

両手を擦り合わせながら呟く。

「寒いには、もう飽きた」

「もうちよつとだけ、待とう」

僕は曇り空を見上げた。

「まだ、雪が降ってないから」

二人、雪を待つ。

あいつが唯一残したものが、カメラだった。

「もう撮る事はないから」

と言いつつ放つての事だった。

「薄情なヤツだよ」

と親近感と一緒に押しつけたシャッター。

ピンぼけも手伝って、自分の顔は酷いものだった。

カメラは今もテーブルにある。

いつか笑顔を撮るために。

息子が手紙を書いていた。

「お空のおじいちゃんに届けるんだって」と、妻。

「紙ヒコーキならとどくよね！」

と言う息子を川原へ連れた土曜日、

何年かぶりに紙飛行機を折った。

『僕は元気でやっています』

2機の紙飛行機は機首を上げて、すいっと舞い上がった。

猫が腹の上によじ登る。

程なく、置き時計が鳴り出した。

寝返りを打ちがてらアラームを止めて

猫を振りほどく。

抗議の声には一切耳を貸さない。

そうしたら猫のヤツ、

器用にカーテンを開けやがった。

朝日の眩しさにカーテンを閉じようとして気付く。

世界が崩壊していた。

「にゃあ」

ぶらりと立ち寄った書店は

人気もなく静かなものだった。

気の向くまま手にした文庫本をばらりとめくる。

何て事もない平坦なストーリーが

ズルズルと続くだけの文章。

何て小説だ？

とため息をついて見たタイトルは、僕の名前だった。

「一手間加えるだけで、世界は楽しくなるんだよ」  
これは彼の口癖。

彼にかかれば、改札口も近未来。

Suicaを忍ばせた手袋をかざして突き進む。

「手の平認証！」

昨夜から続いていたはずの怒りは、笑いに変わった。



朝、大変気持ち良く目覚めますと

頭に一輪の花が生えておりました。

その時のうろたえようと言ったらありません。

ところが街には私と同じように

頭から花の生えた人ばかりではありませんか。

聞けば相手の花の香りを嗅ぐのは

求愛だと言います。

貴方の花を嗅がせてはくれませんか？

今や本も音楽も、手の平サイズの端末で

整理・購入できるようになった。

対して僕の部屋には本とCDがびっしりと並ぶ。

「物ばっかりだな」

と友人が呆れ果てる度、

「物欲の結晶だよ」

とささやかな自尊心を隠して僕は言う。

まだ陽も昇らぬ内に家を出る。

濃い群青の空に街灯が浮かぶ道を歩いて、

明け方の闇に煌々と建つ駅は無人。

やつて来た列車も無人。

脳まで包み込む暖房にうつらうつらしながら、

風景を駆ける車窓はやがて白み始めた。

朝が始まる一瞬を目の当たりにできる、

この時間が至福。



ついのべ抄

#001

了

Written by nakoso (as inabetz)

© nakoso 2010

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

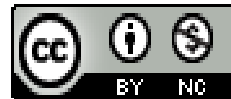
Release Date 2010/2/6

Twitter (as inabetz) :

<http://twitter.com/inabetz>

Mail :

[nakosokan@gmail.com](mailto:nakosokan@gmail.com)



「ついのべ抄 #001」

by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示-非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>